



加納レクポさん(51)=ミュージシャン

—お住まいは？
今は上川管内当麻町ですが、生まれは旭川市の近文です。私の母の家族は「川村カ子トアイヌ記念館」を営み、そのそばで育ちました。小学3、4年生のころ、アイヌ語の上手な親戚のおばあさんが時々来ていて、今考えるともっと話を聞いておけば良かったです。

—その後も旭川に？
社会に出てから地元をはなれ、礼文島に住んだこともありますが、東京にも10年近くいました。親戚の会社でマンションなどの排水管を高圧洗浄する仕事を何年かしていたこともあります。東京では年の近い知り合いが増え、自分で歌を歌うようになりました。ミュージシャンの夫と知り合ったのもこのころです。

—音楽活動について教えてください。

東京で知り合ったアイヌの女性とユニットを作って、ウポボ（アイヌの歌の一つ）を歌うようになりました。2003年にMAREWREW

（アイヌ語でチョウのこと）という女性ボーカルユニットを作りました。結婚や転居などでおたがい活動を休んだり、メンバーが入れかわったりしましたが、今のメンバーになってCDを2枚出しました。

子供が生まれてからは夫婦で学校向けに講演をしたり、読み聞かせの時間にアイヌの絵本をしょうかいしたり、地域のの人にアイヌを知ってもらうためにいろいろ試しています。歌は続けたいですが、最近はパンや菓子作りも楽しく、アイヌが使ってきた食材で新しい料理を考えて広めたい。だから食品衛生管理の免許も取りました。

—読者に伝えたいことは？
自分が好きなことをつらぬくと良いですね。情報が多すぎる時代ですが、みなさんなら情報に流されず、大切なことを見つけれられると思います。

◆
このコーナーではさまざまな仕事をするアイヌの人にインタビューします。

■ヤイサマネナ

学校で習う歌は、始めと終わりや歌う言葉も決まっていますね。ヤイサマネナ（即興歌）は、心にうかんだことを思うがままに歌って、長さも言葉も自由に決めます。ヤイサマネナという言葉をくり返したり、間にその時々思いを詩にして入れたり。メロディは一人一人ちがっても構いません。家族や身近な人に、オリジナルの歌にな

ていきます。
女性が歌うことが多いといわれ、出会い、お別れ、喜び、悲しみ、恋の歌など、ヤイサマネナには歌う人それぞれが人生が感じ取れます。テンポの速いにぎやかな歌は一緒に歌ったり、静かな歌はゆっくり聞き入ったり、楽しみ方もいろいろ。良い歌は多くの人たちによって伝承され、今でも受けつがれています。（泉洋輔・札幌大学ウレシバクラブ4年生）

タンベエヘラムヤン?

「きみ、これ知ってる。」の意味

幸せに暮らす夫婦のもとに、村はずれのおくさんがやって来て戦いに



妻の霊が歌う

一渡島管内長万部町の話
(吉田巖「アイヌ童話」より)

ある村の真ん中に仲のいい夫婦が住んでいました。妻は針仕事や炊事によく働き、夫は狩りに行ってはたくさんのお土産を持ち帰って、楽しく暮らしていました。ある日、村のはしに住むおくさんが訪ねてきました。みると、おこったような顔をしています。そして突然、「私とあなたと、これから命をかけて戦いましょう。勝った方が、この人を夫にするのですよ、さあ」と言い出しました。夫婦はびっくりしてしまつて、あつげにとられていました。しかし、村はずれのおくさんは「さあ、勝負しろ」とせきたてます。その家のおくさんもうとうがまんがでなくなつて、手近にあった刃物を持って下にくさりかたばらへくさりできたようなもの（着物の下にくさりかたばらへくさりできたようなもの）を着ているので、自分も同じものを身につけました。そして、家のおくさんが「村はずれの人！ 一体そのけんまくはどうしたのですか。私の夫をめぐつて勝負などとは、さあ私を殺してごらんなさい」とさげふと、戦いが始まつてしまいました。

どちらも刀をふるつて、おそろしく組み合いましたが、とうとう家のおくさんは殺され、その亡きがらは捨てられてしまいました。

おくさんは海の魔神のせいで死んだのだ。人々は同情して心からいのつた。



「死んだあとで、初めて訳が分かりました。海に住む魔神の6兄弟の、一番下の弟が妻になる女性を探したけれど、神の世界には良いと思う者がいない。そこで人間界を見まわすと、私とあなたの2人を気に入った。どちらにしようか迷つたので、私たち2人に殺し合いをさせて、死んだ方のたましいを持ち去つて妻にすることにしました。私はこのために死んで、魔神の妻にされてしまった。魔神のすみかはおいしいものも何もない。今日、こちらでお酒を造つておいのりをしたことが分かつて、なつかしくて来たのです」と泣きながら話しました。村はずれのおくさんもそれを聞いて泣きま

した。夫はぼうぜんとしていましたが、大きな器にお酒を入れ、「満足のいくだけ味わいなさい」と言っておくさんに供えました。そうしてしばらくたつと、おくさんの霊は、美しい声で別れを悲しむ歌を歌い、立ち上がりました。村はずれのおくさんが泣きながらすがりつこうとしたが、また雲となつてけむりだしから帰って行きました。集まつた人々はみなみだを流し、おくさんをお酒と料理をさげました。それから村はずれのおくさんは、いつもいつも心をこめてお供えをしたためか、その後は幸せに暮らしました。

魔神が女性を操る

このお話は日本語のあらすじだけが残つていて、分かりやすくするために文をおぎないました。
はじめに村はずれの女性が突然刃物を持ってその家の女性におそいかかり、殺してしまつてしまった。後半で、実は海に住む魔神が女性を操つておそわせたということが分かりました。このようにカムイが人間を好きになると、その人を死なせて、たましいだけを連れ去つて結婚するといまいます。死んだ人はあの世に行き、いつかまた生まれ変わりますが、カムイに連れ去られた人はカムイの世界に行つてしまします。この不幸な女性は、親しい人々と別れ、ちがう世界に行く悲しみを歌で伝えたのです。

ところで村はずれの女性の夫はどうなつたのでしょうか。女性も人を殺してしまつたのに、そのままその家に暮らすのも不思議です。元のアイヌ語のお話では説明があつたのかもしれませんが。

すると、村はずれのおくさんは今の今までおかしくなつたかのようにあつたのに、急にわれにかえると自分のしたことにあつた。あ、なんてことをしてしまったと泣きだしました。しかし、死んでしまったおくさんを今さらどうすることもできません。結局村はずれのおくさんは、その家で暮らすことになりました。それからある日のこと、夫が「どうも昨日は悪い夢を見た」と言いました。こつこつと夢を見たときは、よくないことが起るの、お酒を造つて神様にいのりすることになりました。倉庫から工を出して、うすづいて、大きなたるに二つ三つお酒をこみしました。2、3日してお酒ができると、村中から親類や親しい人を呼びました。夫は神様にいのりをし、亡くなったおくさんにもお酒やイナウを供えて何事もないようにいのりました。すると、家の屋根のけむりだしたところから白い雲のかたまりのようなものがフワフワと入つてきて上座のところに下りました。集まつた人々はびっくりして、じつとその雲を見つめました。すると、それは先に殺されたこの家のおくさんの姿になり、今のおくさんのとなり

人々が集まった時、白い雲のようなものが入って来た。それは死んだおくさんだった

